

土山の宝篋印塔

つちやまのほうきょういんとう



文化財愛護シンボルマーク

名称	土山の宝篋印塔	時代	鎌倉時代、元亨3年(1323)
別称	土山の石造宝篋印塔、土山の元亨三年宝篋印塔、土山共同墓地の宝篋印塔、石造宝篋印塔	所在地	加古川市平岡町土山357土山共同墓地内
数量	1基	所有者	土山町内会
法量	塔高163cm(基礎から相輪までの高さから塔身下の基壇の高さを差し引いたもの) 総高199cm(基壇から相輪まで)	指定	兵庫県指定文化財
材質	石造、花崗岩製	指定分類	建造物
		指定名称	石造宝篋印塔
		指定年月日	昭和50年(1975)3月18日



土山の宝篋印塔

平岡町土山、旧山陽道が喜瀬川と交わる土山橋の西、土山公会堂前の小路を北に約70メートル入ると大師堂、土山公会堂分室があります。その奥の土山共同墓地の北側に、鎌倉時代の元亨3年(1323)の銘文をもつ宝篋印塔が建っています。

宝篋印塔とは、基礎、塔身、笠、相輪からなる塔の一種で、笠を段形につくり、軒の四隅の隅飾を立てた形をしています。宝篋印塔という塔の名は、宝篋印陀羅尼の経文を納めたことから名付けられているといわれますが、主に供養塔や墓碑として造立されています。

この宝篋印塔は、花崗岩製で、高さ七尺の大塔です。現在は、東面を正面として祭壇が置かれていますが、塔身の阿弥陀如の配置から南面を正面として造立されたと考えられます。

この塔の特徴として、塔身の四面のうち南面に舟形光背の中に定印の弥陀立像、東面と西面には観音と勢至と考えられる菩薩立像がそれぞれ彫出されていることがあげられます。このように塔身に仏像を彫った例は珍しく、貴重なものです。また、塔身の北面に鎌倉時代末期の元亨3年(1323)の造立を示す四行の銘文があります。

この塔は、反花式基壇の上に建ち、基礎は、上部に二重の輪郭をめぐらした反花座を造出し、下部は各面輪郭を巻き格座間を入れ、その内に開蓮華を浮き彫りにしています。

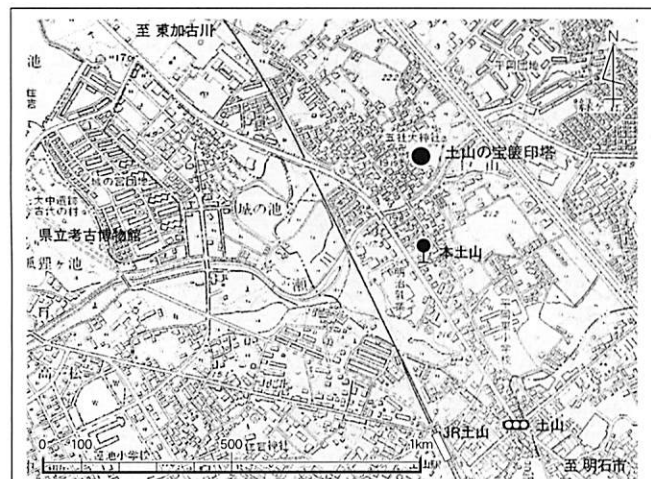
基礎上部の反花座の上に、さらに重ねるように高さ12cmの反花座がありますが、これは様式からみて江戸時代後期のものと考えられ、後世の補修によって取り付けられたとみられるため、兵庫県指定文化



宝篋印塔(南東から)

[塔身銘文]

九月十八日	元亨三年	尼妙阿	為二
		□	□
		□	□



基礎左側面銘文



土山共同墓地前的大師堂と公会堂分室



塔身拓本(左から、勢至菩薩、阿弥陀如来、観音菩薩、銘文)

財からこの部分は外されています。

塔身は、前述のとおり、北面は素面に銘文を刻み、他の三面は輪郭を巻き、それぞれ蓮華座上に光背を彫りくぼめて籠状にした中に、仏像を刻出しています。

笠は、下二段上六段の定型式で、隅飾はやや外傾し二弧で輪郭を巻いていますが内部はすべて素面です。

相輪は、九輪の第七輪目以上を欠失しているほかは各部を完備しています。

この塔は、宝篋印塔をはじめとする石塔建立の黄金期である鎌倉時代後期に造立されたもので、各部の形式がよく整備されているだけでなく、細部の手法も優れており、加古川市を代表する石造美術のひとつにあげられます。

(拓本/『加古川市史 第7巻』から転載、文・写真/宮本)

[各部法量]

- 相輪…現高53cm
- 笠…高41cm・幅52cm
- 塔身…高28cm・幅29cm
- 基礎上反花座…高13cm・幅38cm(後補)
- 基礎…高41cm・幅55cm
- 基壇…高23cm・幅76cm(後補)

●参考文献

- 『兵庫県大百科』神戸新聞出版センター(1983年)
- 『加古川市史 第7巻』加古川市(1986年)

●キーワード

建造物、宝篋印塔、土山共同墓地、弥陀三尊、元亨三年

●所在地/加古川市平岡町土山357 土山共同墓地内

●交通/J R山陽線「土山」駅から北へ徒歩11分
J R加古川駅発「明石駅」行神姫バス「本土山」バス停から北へ徒歩5分
車は加古川バイパス「明石西ランプ」から北西へ1.5km